

批評及び紹介

エリオット氏著「印度教と

佛教」

特にその一章「中央亞細亞」

の條に就いて

石田幹之助

目下東京駐紮の英國大使サー・チャールズ・エリオット

（Sir Charles Eliot）氏の大著 “Hinduism and

Buddhism. An Historical Sketch” 三卷が一昨年倫敦の

書肆 Edward Arnold & Co. から出版せられてからも

う大分月日がたつ。新刊の紹介としては少しく時期

を失してゐるかも知れないが、私は茲にこの大作の

一部、即ち第三卷中の一章（通巻第四十一章）「中央

亞細亞」の條に就いて少しく自分の割記を抄出して

見度い。敢て紹介といふ程のものではなす。

エリオット博士が佛教學者として聞えてゐるのも

久しいものである。然しこの方面の研究を纏つた著

書として發表されたことは、私の寡聞なる今迄には

まだどうも無かつたやうに思ふ。が、本書の序文を

讀むに及んで私は果してそのいはれのあることを知

つた。博士は明治四十年から稿を起してこの浩瀚な

る三卷の大著を世に送るべく致々として日夜専心に

その筆を急がせてゐたのである。本書は第一卷序文・

目錄・緒論等百四頁、本文三百四十五頁、第二卷本文

三百二十二頁、第三卷本文・索引并せて五百十三頁、

通計菊判千二百八十四頁の尨然たる大著である。著

者自らの語る所に據れば明治四十年筆を執り始めて

から以來、大正三年歐洲に大戰の勃發を見る少し前に至つて全編の略々脱稿を見るに及ぶ迄、前後約八年間の苦心に成るものが即ち本書であつて、恐らくこの方面に於ける著者多年の造詣を傾けて畢生の心血を注いだ勞作であらうと思はれる、今その略目を舉げると、第一卷は序文、第一編「緒論」(二十五節)、第二編「上代印度宗教概観」(Early Indian Religion: A General View)(第一章乃至第七章、主として佛教以前の印度の宗教、即ち吠陀の宗教・耆那教等を説く)、第三編「巴利傳佛教」(Pali Buddhism)(第八章乃至第十五章、巴利經典に據る佛傳とその教義とを説く)より成り、第二卷は第四編「大乘教」(The Mahayana)(第十六章乃至第二十四章)、第五編「印度教」(Hinduism)(第二十五章乃至第三十三章)の二編に分れ、第三卷は第六編「印度以外に於ける佛教」(Buddhism outside India)(第三十四章乃至第五十四章、錫崙・ビルマ・暹羅・東埔寨・占城・爪哇及び馬來諸島・中

ヒリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

央亞細亞・支那・朝鮮・安南・西藏・日本に於ける佛教の消長を叙す、内支那百十餘頁、西藏五十數頁)、第七編「東西の諸宗教相互の感化」(Mutual Influence of Eastern and Western Religions)(第五十五章乃至第五十八章)の二編と索引とから出來てゐる。されば印度に於ける諸宗教の盛衰と亞細亞の各地に於ける佛教の興廢、變遷の跡とは、悉くこの三卷の書の中にコンデンスされてゐると云つても過言ではなからず。從來一部の著書にして斯くの如き題目を斯くの如く萬遍なく、而も斯くの如くかなり詳密に論じたものは一寸その比儔を見ない。殊にその最近の發見に係る新資料、最近の發表に係る新研究を普ねく攝取して自由に且つ極めて批判的に之を取扱つてゐる點は後出の書物だからでもあらうが、無論本書が今特にその價値を多からしめる所以だと思はれる。又著者の論斷は決して前人の後をばかり追つてゐるものではなく、到る處に著者独自の新しい見解の散在して

ゐるのが目につく。のみならず、著者の意見はまた机上の研究からのみ出たものではない。本書の起稿以來著者は機會さへあれば屢々支那印度を始め廣く西藏を除く東亞各國の佛蹟其他を踏査して、十分に *first hand* の知識を用意してゐる。これらのこともこの書の内容をして重からしめる一つの大切な要素であると思はれる。私は佛教の歴史、印度教の沿革等に就いては全く盲目同様の門外漢であるが、この書を手にしては何となくマイスターの書いたマインツ・エルクであるといふやうな感じのするのを否む譯に行かない。文章は簡潔平明、少しの無駄もなく、而も決してひどく肩の凝るといふやうなものでもなく、どこといつて指摘するのは難かしいが、自ら所謂英國風な趣がそれとなく漂つてゐるやうな處も少くはないやうに思はれる。

エリオット博士の博學と多方面とは少しく氏を知

る人のよく知つてゐる所である。外交官として氏の經驗に富んでゐることは、一八八八年、二十四歳の少壯書記官として在露都英國大使館に出仕せる際以來、或はコンスタンティノープルに、或はモロッコに或はブルガリア若しくはセルビアに、或は又北米華盛頓になど、或時は書記官として、或時は代理公使として色々な位置に歴任せることに就いても徴すべく、植民地などの長官としても適任であつたことは英領東亞弗利加保護國の總督をしてゐたことのあるのでもよく分る。嘗て一時英國委員としてサモア群島の管理に任じたこともあり、今次の大戦に聯合國が西伯利亞出兵を決するや、英國政府の代表委員として同地に活動したなども、やはりこれらの方面に於ける氏の手腕を證する實例であらう。又氏が教育家として令聞のあつた事はシェフィールド大學に副總長を勤めてゐたことや、香港大學に暫く總長をしてゐたことから窺はれる。更に海産動物學の一方

の大家としての博士は我が東京帝國大學理科大學の
紀要に寄せられた數篇の論文を始め、多數の Papers
がよく之を證明する。Linguist としての博士の名聲

は最もポピュラーであるが、それに就いては世にどん
なことが傳はつてゐるだらうか。故ドクター、モリ
スン (Dr. Morrison) は私に告げて、博士が二十四ヶ
國の語言に通ずることを云つた。又嘗て私が支那で
會近した一英人は香港大學の出身者であつて親しく
博士の教を受けた人であるが、博士が支那各地のダ
イアレクトに精通し且つよく之を語ると云つた。甚
だしくは博士が西伯利亞にある當時、東京朝日の特
派員鈴木文史朗氏は博士が六十ヶ國の言葉に通ずる
といふ通信を書いてゐる。私はこれらの話のどこ迄
が本當でどこ迄が「話」であるかを知らない。然し兎
も角博士が人一倍多くの言葉を解するといふことだ
けは、かういふ「話」からも或程度迄の想像は十分出
来る。——然らば佛教學者・印度學者としての氏の聲

價を證するものは何であるか。恐らくこの書三卷が
何物よりも適當に之を語つて雄辯なるものではない
かと思はれる。

私は目下の事情ではとてもこの大著を讀み通す時
間を持ち得ない。私の幸に一瞥することの出來たの
は僅に第一卷の序文・緒論、第三卷の卷頭數頁と第四
十一章「中央亞細亞」第四十二章乃至四十六章「支那」
及び第五十五章乃至五十八章即ち「印度に及ぼせる
クリスト教の影響」、「西方に及ぼせる印度の威化」、
「印度に於けるペルシアの威化」、「印度に於けるマホ
メット教」等、極めて一部分に過ぎない。その中でも
前にも述べたやうに茲には中亞に於ける佛敎を論じ
た第四十一章だけを取つて少しくその内容を抽記し
て見度いと思ふのである。

この章は更に五節から成り、その各節は別に名は
無いが大體その内容をいふと次のやうになる。(1)は

序言とも云ふべく、主としてタールムの盆地に於ける近頃の考古學的探檢の成果に基いてこの地方の佛教史の研究に資すべき各種の材料若しくは一般的背景ともいふべきものを概説し、(2)はこれらの新資料を補助とし、支那の史籍を主なる根據としてタールム盆地の政治史の概要を説き、然る後やはり同様の Jones に據つて (3)この地の主要な都市國家、即ち疏勒・龜茲・高昌・于闐等の歴史、特に佛教關係の史實を他の諸節に比しては稍々詳細に記述し、(4)第四節に至つて總括的にこの地方に佛教の始めて傳はつた年代の考察を試み、(5)最後の節に於いてタールム盆地で印度・イラン・シリア・支那等の宗教が互に相接觸して如何に影響しあつたかを論じてある。之を通じて讀するに、これだけの新舊の資料をこれだけに消化して、而もこれだけ簡明にこの地方の古代史・中世史を書き上げた人は私の寡聞を以てしてはさう外にはないかと思はれる。伯林のリーダース教授の近業

「東トルキスタンの歴史・地理に就いて」(H. Linders, Zur Geschichte und Geographie Ostturkestans, 1922) が恐らく色々な點に於いてそれに類するものであらうとは思はれるが、近くその到着を豫期されつゝも、私はまだこの稿を終る迄に右の一篇を見ることが出来なかつた。いづれにせよ、この一章はタールムの河盆を中心とする中亞佛教史の概説としてこれからその詳細を究めんとするものには好個のプロローグメナであり、既に一應その史實に通じたものにとつては適當なるサンマリーともなる。専門の東洋史家乃至佛教史家には或は少しく一般的・序説的に過ぎるかも知れないが、私は出来るならばこの一章全體の譯出を試み度いとも考へた。然し今は殆んど僅か三十五頁の譯出さへその暇を缺くので、初めの第一節と最後の第五節とを取つてその大體を傳へ度いと思ふ。

先づ第一節を譯出する。大體原文を離れない方針

て筆を運んだ積りてはあるが、時には少し自由に意を採つた處もある。曰く、

「茲に中亞と稱するのは主としてターリムの盆地をさすのであるけれども、時にオクソスの流域及びバダクシャン等との隣接諸地をも指すものと承知せられたい。この盆地は一の陥凹地帯であつて三面繞らすに高山を以てし、唯々東方に於いて支那本部と相界するあたりに限りその屏障が稍々低緩である。全地域の水はターリムの諸支並に本流を通じてロプ湖に注ぐ。ロプ湖は湖とは名ばかりで今日に於ては纔かに稍々水を湛へた一濕澤に過ぎない。盆地は到る所砂漠であつて主としてその縁邊に近く沃地の參差として點在するのを見るに止まる。その肥沃な部分は嘗ては今より遙か重要な地域であつたけれども、二三十年前迄はこの邊陲の荒涼境は何人の興味をも惹くに足らず、僅かに二三の遊獵家と地學者とを誘ひ得たのに過ぎなかつたのである。所が最近この地

ニリオット氏著「印度教と佛敎」に就いて

方に於ける探檢の成績はいづれも重要にして且つ驚心に値する。燥乾なる沙積の裡より發見せられたものは獨り遺蹟・雕像・壁畫の類に止らず、十數種の語言を網羅せる文記の櫃室にして完きまゝに世に出てたるものさへ若干を數へる。斯くの如き發見が亞細亞の歴史一般に對して如何に貴むべきものであるかは、餘りに明白にしてまた一言の贅辯を須ひない。

我等が當面の問題に就いてはその重要洵に絶大なるものがある。蓋しターリム地方並にその隣接諸國は嘗て數世紀間佛敎弘通の孔道に當り、久しくその中心たりし地域であつて、又今その起原を詳かにしない幾多の變動も恐らくはその舞臺をこれらの地方に求むべきものと思はれるからである。然し乍ら余は多くの學者が蒐集資料の藏儲を未だ公にするの運びに至らず、否、完全に之を著録するさへなほ能くせざるに先だつて早く既に中亞の佛敎を論じなければならぬ。それは余の不幸とする所であつて、本章に

記する所は要するに一篇の試案に過ぎず、到底完璧を求むるに難いものである。讀者が姑く之を咎むるなくんば幸である。これらは年と共に未知の文獻、未知の藝術品の新に世に現はるゝに隨つて必ず増補せらるゝ所あるべく、又恐らくは訂正せらるゝ所もあらうと思ふ。

ターリムの盆地は之を水に喩ふれば靜池の水ではない。或は海へ流れ或は海より差しくる潮汐満干ある河中の水潦にも比べようか。斯かる水潦の中には甚だしく出自を異にした生物の並び存すべきことは想像に難くない。斯くの如くにして東より西への流れと西より東への流れとは共にターリムの盆地を過つて、凡そこの地に生育し得べきものはすべて之をこゝに遺して行つた。即ち支那の政令とその文明とは東より來り、イラン民族は西方より小亞細亞及びビザンチウムから漂つて來た碎片をも携へてこの流水の中に現はれ、更に他の諸潮流は印度人及び西藏

人を南方よりこゝに招致することを忘れなかつた。

ターリム地方の歴史上特に興味ある一事はこの地がバクトリア並にアレキサンダー大王に依つて征服せられた諸國に相隣りし、それら諸國を通じて西方の藝術・思想に接觸した點にある。更に擧ぐべき一事はその住民が嘗にイラン種族を包含せしに止らず、古來未だ知られなかつた一アールヤ語の常用者をも數へたことが即ちそれである。このアールヤ語族の爾く東方にかけ離れて孤存せしことは、アールヤ種族の歴史に關し或は我等の知見を改訂せしむる端となるかも知れない。第三に特色あることとして擧ぐべきは歴史の曙光が漸く差し初めた古へより中世紀に及ぶ迄、慄悍な游牧民族が絶え間なくこの地を馳驅縱横せる一事である。すべてこれらの民族は、そのイラン種たるのとトルコ種たるのと蒙古種たるを問はず、いづれもみな同一の特性を具へてゐる。彼等は彼等固有の文化は低いけれども、他の思想を採取

し且つ之を傳播・移植したことが即ちそれである。この類の事實中、最も著しい實例としてはイスラームの歐洲並に印度流傳を推さざるを得ない。上代に於いては爾く著しい事件の起つたのを知らないけれども、而もトルコ種に屬する諸部族が摩尼教及び景教（ネストリウス宗・クリスト教）を支那に傳へ、又佛教の流傳にも蔑視すべからざる役割を勤めたことは記憶しなければならぬ。

近く發見せられた手鈔本並に碑銘類に現はれたる語言の略目を一瞥すれば、中亞に於て如何に多くの勢力が働きつゝあつたか、又この地が文化集散の中心地として如何に重要な處であつたかに就いて、たとへ當座の豫備知識の程度には止まらうが然し確實なその概念を得るに困難ではない。同一の時代に並び行はれた語言の種類は日常の用語たると學問上の用語たるとを問はずその數が極めて多く、敦煌「に於けるが」如き諸國語の文記より成る大文庫は云ふ

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

迄もなく、吐峪溝に於ける小襲藏の如きても梵文・摩尼教語・シリア語・ソグド語・回鶻語及び漢文の文獻を網羅してゐる有様である。書鈔に用ゐられた材料が幾様もあつたことはその語言の種類別の多様であつたのと同様で、或は輸入品なる貝葉あり、樺皮あり、或は木簡・竹簡の類あり、鞣皮あり、紙あり、紙は實に第一世紀以來既に使用せられてゐたものであることが知れる。これらはみなこの地の燥乾な大氣の中にあつて奇しくもその長生を喜ぶことを得たものなのであつた。

發見せられたる多數の梵文の文記はすべて宗教關係のもの、若しくは准宗教關係のものであつて、後者は當時爾く考へられてゐた醫術・語法に關する書が之に居るのである。比較的後代の大乗文獻は豊富に存するけれども、更に興味深きは茲に發見せられなかつたならば全く世に佚して終つたらうと思はれる。「小乗の」梵文聖典の諸部があることであつて、たと

へ言々語々相吻合はしないとしてもその内容は巴利聖典の當該部分と相對應するものに係はり、恐らくは多くの漢譯三藏の原文たりしものやうである。斯かる鈔本にして今日迄に公刊せられたものには雜阿含及び增一阿含に屬する經文があり、「法句經」の要部があり、一切有部の「十誦律比丘戒本」がある。法顯の言ふ所に據れば中亞の僧侶はいづれも天竺の語言の研修者であつたが、七世紀に於いてもその然りしとは玄奘が龜茲國に就いて云へる所に徴しても知るとが出来る。されば梵語文典の斷片が嘗て吐魯番の附近から發見せられたのも尤ものとてあつて、兎も角も上代に於いて梵語がこの地の教養ある人士の間に通じてゐたとは想像に難くない。またミンオイ (Ming-Oi) 出土の貝葉には佛教戲曲二種の斷簡を含むものがあり、その一つは實に馬鳴造の「舍利弗衆事」(Śariputra-prakarana) である。その書風は迦風色迦王時代のものに係ると信ぜられるから、我等は之

を以て今日迄に知られた最古の梵文寫本なりとし、又印度戲曲最古の標本なりと考へることが出来る。兩者はいづれも印度のクラシック戲曲と同じく梵語並に諸種の俗語を以て綴られてゐるが、この俗語に至つては印度の方言の發達史上、今日迄未だ知られなかつた某々階段を代表するものであつてその或るものはかの阿育王碑文の用語と極めて密接な關係のあるものである。また別に俗語譯の「法句經」があり、佉盧風叱文字を以て記るされ、デウトリニエ・ド・レン (Dutreuil de Rhins) 一行の和闐附近で獲た所であるが、スタインも亦この地方よりこの語この文字にて書かれた多數の官符・公牘の類を將來してゐる。これらはみな大約印度に於ける貴霜王朝と時を同じうするものであることは略々疑なく、また中亞に於いて印度の俗語と梵語とが並び行はれた一事はこの兩地の連絡・交通が單に佛教の流傳にのみ依るに非ることを明證するものである。

中亚の地が學界を驚かしたのは獨りこれら前代未聞のブラークリットの色々な形を以てしたのに止らず、この地はまた二種の新言語を提供して學者の耳目を動かしたのであつた。これらは共に中亚笈多^{グプタ}字と稱せらるブラーフミ(Brahmi)文字の一種を以て記されてゐる。その一つは屢々「北アールヤ語」(North-Asian)と稱せられ、また二三の學者によりてはかの紀元二世紀の頃以來印度に侵入せる塞民族(Sakas)の言語と認められ、更に他の諸學者によりては貴霜種族並に迦膩色迦王國の語言と解せられる者であつて、其根幹をなすものはイラン語であるけれども、而も印度の語風に影響せらるゝ所が随分甚だしいと稱せられる。この語に翻譯せられた大乘の諸典も少くない。金光明經・金剛經・無量壽經等はその一例であるが、その主としてターリムの盆地の南邊に於いて使用せられた語言なることは殆んど疑がないと云つてゐる。第二の新言語は主としてターリム盆地の北縁

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

に行はれたものであつて今日迄吐火羅語(Tokharian)と呼ばれて來たものである。この稱呼はこの語が吐火羅人即ちインドスキュタイ「西人は之を以て月氏を指す」の言葉であるといふ意を寓するけれども、未だその確證がない。故にこの語を以て姑く之を庫車の言語即ちKuchieseなどと呼ぶ方が安全であらう。この語はA種とB種との二方言に分れて存し、兩者の地理的分布はなほ明瞭を缺くけれども、七世紀前半の年紀ある多數の公牘類の示す所に據れば、これが龜茲及び高昌地方の日用語であつたことが分る。この語はまた文籍にも用ゐられた言葉であつて、發見せられた多くの譯書の中には、この語を以てせる「法句經」及び律藏諸書の翻譯がある。こゝに極めて興味あることは龜茲に於ける上代の、恐らくは同地本來の住民によつて使用せられたと思はれるこの言語が、たゞにアールヤ語系に屬するのみならず、その東派によりは更に西派に一層多くの親縁を示す一

事である。この語はインド・イラン語群に編入することを許さず、却つてラテン・グサートキ・ケルティック・スラヴ・オニツク及びアルメニアンとの類似を示し人を惑はすものがある。その支那佛教文獻に感化影響を及ぼしたことは勿論のことであらう。

前に述べたプラトフミ文字を以て記せる北アルマ語の外に、なほ三種のイラン語がその文記の斷簡を中絶に残してゐることも明かになつたが、これらはずべてアラメア起原のアルファベットを以て書寫せられてゐる。その中二種はそれぞれサーサン朝ペルシアの西南地方及アルサケス朝ペルシヤの西北方面「バルテア」の言葉を示すもの、やうに思はれる。この兩種の國語を以て傳へられた諸本は摩尼教關係のものであるが、第三の言語、即ちソグド語なるものはその文記の内容が更に種類に富んでゐて佛教・摩尼教・クリスト教關係の編章を提供する。その年代は凡そ佛・摩・耶の順序になつてゐる。この語は

もとサマルカンドを中心とする一地方の語言であつたが、國際的の性質を得て全タトリスム盆地を通じて諸々の商賈の間に使用せられ、更に支那に迄も傳播するに至つたものである。なほシリア語を以て記したクリスト教關係の諸本が亦こゝに發見せられたことも序に茲に記して置きたい。

オルコン碑文は通常「ルーニツク」(Runic)と稱せらるゝ文字を以て記した古代トルコ語を現はしてゐるが、この「ルーニツク」のアルファベットは敦煌及びミラン(Milan)に於いて發見せられた諸鈔本にも之を使用してゐるものがある。併しその今日迄公刊せられたものにはまだ一つも佛教關係のものを見ない。されどトルコ語のもう二つ別の一方語、即ちシリア文字から脱化した「所謂」回鶻文字を以て記したものに至つては、ソグド語と等しく廣く佛教・摩尼教及びクリスト教關係の文獻に使用せられてゐる。回鶻「タ」といふ冠辭は寧ろその文字にこそ適用すべけれ、

その語に冠せしむべきものではないであらう。蓋し「云ふ所の」回鶻語なるものは天山の南北に亘つて通用した幾多のトルコ語系方語の文章語形であつたやうに思はれるからである。この方語が盛に佛典に使用せられるやうになつたのは、回鶻がタリム盆地に於ける西藏人の勢力を撃破して、彼等自らの國家を打ち立てたる時以來のことである。その流傳して

遂に支那にも及び、且つその長く行はれたことは回鶻文の諸經文が二三〇年「元の文宗至順元年」北京に於いて印行せられしが如きこと、及び康熙年間（一六六二——一七二三）の書寫に係る回鶻文の文籍が蘇州の一僧院に發見せられしが如きことを以て之を證することが出来る。余はこの文字の更に變化せるものが縦書させられて今なほトルコ語の一方語を使用してゐる甘肅省の某々地に行はれてゐる旨を聞いてゐる。トルコ語は斯くタリム盆地の東西に於ける佛教徒の間に使用せられたにも拘はらず、干闥

へは回教徒の征服を俟つて始めて傳來したやうに思はれる。以上の外なほ今日迄知られなかつたセム系統の文字があつてその「文記の」殘簡を發見するけれども、いづれも零本に過ぎない。これは或は白匈奴即ち嚙噠の書契ではないかと信ぜられる。

所て西藏人は少くも八世紀の中葉より九世紀の頃に至る迄タリム盆地を左右した勢力であつたから西藏文の鈔本の大襲藏が和闐・ミラン及び敦煌の諸地から發見せられたことは毫も怪しむに足らぬ。たゞ土魯番に於いてはその地が更に北方に偏してゐるが爲に西藏の影響の迹は絶無てこそなけれ遙かに僅少である。これらの「西藏文の」新出の文記は九世紀以前のものであつて多くの公牘及び商業上の記録を含み、且つ佛典の譯本も亦少くない。これらはいづれも西藏語の沿革を討ねるに大いに重要なものであつて又その書寫せられた當時に於いては佛教は精々 Bon 教の傍ら西藏人の讚仰を得てゐたに過ぎな

かつたことを示してゐる。因みに西藏語に翻譯せられた摩尼教若しくはクリスト教の文獻は未だ一つも發見されてゐない。

漢文で書いた諸本は宗教的なる否とを問はず、その重なる中心地のすべてに遺存せるものが極めて多く、いづれも數多の興味ある事實を提供してゐるけれども、就中次にその二條を摘記してみよう。第一は敦煌附近に於ける古への邊境守備隊の哨營址より紀元前九八年乃至紀元後一五三年に互る年紀を明記した一群の文書の發見せられたとである。これに據つて考へると支那と中亞との間にこの時代既に「立派に」往來のあつたことを認容するに何等の困難を感ぜない。第二は唐代の文籍の中に往々摩尼教關係のものを見るとがそれであるが、然しこれらはみな佛教及び道教の思想を混入してゐるものである。中亞に於ける宗教上の遺物には空塔婆・石窟及び寺院又は僧坊として使用せられた諸種の屋蓋ある建

物をも數へ、佛教・摩尼教及びクリスト教關係の大廈にして發見せられたものが少くない。然しザラトゥーシトラ教(祆教)はこの地方に多くの信徒を持つてゐたのに拘はらず、その祠堂の發見せられたものはまだ一つもないらしく、又印度教の諸神の畫像は既に發見せられてゐるにも拘はらず、印度教が佛教の外に別に存してゐたといふとはまだ之を聞かない。佛者が禮拜の爲に「壁畫又は彫刻を以て」裝飾せる窟院は獨りターリムの盆地に見出されたのみならず、支那本部との界上である敦煌及び山西北部の大同府並に河南省龍門の峽隘にも之を見ることが出来る。これらの諸石窟を通じてその大體の仕組み及び様式は大約同様であるといふものゝ、大同及び龍門の二者に於いては多くの印度の石窟に見るやうにその諸像と裝飾とが眞の彫刻であるのに反し、敦煌及びターリム地方の諸窟にあつてはその壁面が壁畫を描く爲にしつらへられてあつたのみならず、諸像もみ

な漆喰細工に止るのをその異點とする。この裝飾様式「即ち専ら壁畫と漆喰細工とを以てするもの」は實に中亞に共通なるものであつて寺院の諸壁を飾る諸像の如きいづれもみな同じ作り方に依つて塑成せられたものである。寺院と石窟とが時に相連なるともあつて例へばベゼクリク (Bazilik) に於けるやう

に、山の二隅に掘鑿せられた一群の窟院を脊にして多くの伽藍が段丘の上に建立せられてゐることなどが即ちそれである。屋蓋ある建物のよく今に存せるものは極めて少い。然し乍らその幾分は高く聳えたる四角形の構造であつてペルシアに於いてよく見る形の圓蓋を戴くものであつたことは確實なやうであり、又幾分は樽形の屋根を有し略ミナル (Minar) 及びチニザルラ (Chizarla) の制多 (Chaitya 即ち刹・廟) に似たものであつたやうである。ルコックに據ればこの「後者の」建築様式も亦ペルシアに之を見ることが出来るといふ。最も普通なる寺院の形式は前に本堂が

あり、奥に小庵があり、その後廻り歩きに堪へる廻廊を有すといふやうなものであつたが、かゝる本堂は往々側房を附して之を擴げることがあり、又時に數個の正方形の中庭の中に一堂を取り圍むやうな式も存してゐた。

窣堵婆も澤山に發見せられたが、或は窣堵婆のみ單獨に出土せるもあり或は他の建築物と相伴つて發見せられたものもある。その最もよく留存してゐるものは（兎も角も極めて微細の點までも圖示せられてゐるのは）ラワク (Rawak) の窣堵婆である。これはその作りは方形にして「四邊を」劃するに壁を以てし、壁の上にはその内外両面ともに色彩を施した漆喰細工の巨像を連ねて之を裝飾してある。圓蓋は三段に排せられた方形の基底の上に組み上げられてゐるが、この排し様はトルキスタンのすべての窣堵婆に特有なる様式であつてまたカール河流域及びその隣接諸地のそれらにも特に見る所のものであると

傳へられる。

中亞に於けるこの建築〔即ち窣堵婆〕は「その様式等に於いて」何等支那に負ふ所はなく、印度（特にガンダーラ）及びベルシア系の要素を併せ含んでゐるやうに思はれる。その著しい特徴の多くは、たとへ「印度其他の」他地方にあつては爾く普通のものではないとしても、少くとも廣く各地に散見するものであることは覆ふことが出来ない。斯くてミノイに於ける窟院の或るものは、方形の中に更に一つの方形を或る角度を持たして互ひ違ひに置き並べたやうな模様、「即ち④の如き模様」の集成で飾られた圓蓋を屋根に戴いてゐるのであるが、これと同様な裝飾はカシミールのパンドレンタム(Pandrentham)にも、またバミアン(Bamiān)にも均しく存してゐると傳へられてゐる。

中亞の古物中にはまた窟院及び諸建築の壁上に描かれた壁畫並に絹本・紙本の繪畫をも算へる。この類

の美術の起源がいづこにあるや、その最も親縁のあるのはいづれてあるか、これは今日なほ研究中の問題に屬し、茲にそれらを論究するに於いてはそのいづれも余をして余の本領より餘りに遠く逸出せしむる恐れがある。然し乍ら唯々數條だけは別に面倒な考證を須むずに相應の確信を以て茲に之を述べることが出来さうである。ガンダーラの風化が建築・雕刻及び繪畫を通じて明瞭であることが先づその一つである。最も古き作品は單純にガンダーラ式といつて起れて説明がつく。されどこの初期の畫風に繼いで起つたのは又一種別な、手法に於いても「主題」の神話に於いても共に一歩進展の迹を示してゐる一風であつて、それは疑もなく印度本地の佛教美術を顯現してゐるものに外ならぬ。たとし中亞の畫家並に彫工が些か之に取捨を加へたものであることは忘れてはならない。されば土魯番の壁畫の中に衣紋の描法及び構圖に於いては印度風であり乍らその「人物の」

面貌に於いては東亞的なものゝあることは怪しむに足りない。またこれらの壁畫には「東亞的の人物を畫く以外に」時に朱髮碧眼の一人種を描いてゐるものもあるが「これも印度風の繼承といふのではないのであつてこの土地柄この邊の人間の顔つきが自ら現はされたものと思はれる」。

大體に於いてこの地の繪畫は寧ろ極東の藝術が印度佛敎に存する思想意匠に依つて侵略を受けたかたちを證據立てこそすれ印度の威化と支那の威化とが等分に結合したものであることを示さない。然し乍ら或る種の裝飾に於いては、特にイディクートシニエリー (Idikutshin) に於ける汗カシの宮殿に施されたものに於いては、支那の様式が主として重きをなしてゐるのを見る。また佛敎傳來以前の上代の繪畫にあつてはその様式の中亞も支那と同様であつたらうといふことは殆んど疑を容れない。七世紀に於いて于闐の畫家の尉遲跋智那といふものが支那に移住してそ

の子の尉遲乙僧と共に大名を馳せた」といふことは既に多くの印度式を加味した中亞の美術が遂に支那方面迄も東漸した一著例とも云ふべきであらう。

ペルシアの威化も亦多くの繪畫に之を徴することが出来よう。その著しき一例はスタインの公にした一見同一の菩薩を表はしたと思はれる二つの圖版に就いて見ることが出来ようと思ふが、その一つに表はされた菩薩は常に目撃する印度式の姿態をしてゐるのに反し、今一人の菩薩は一見して黒鬚にして長靴を穿てるペルシアの王族を描いた小幀畫ミニチュアの如き想ひを起さしめる。たゞその四臂なる姿を異とするだけのことである。果してこれは摩尼敎關係の繪畫であつてその性質に於いて殆んど印度的要素を缺いてゐるものである。これらは所謂「佚滅せる後期古代派 [Spätantike Schule]」の一つを代表するものであつて屢ミビザンチン藝術を思ひ起さしめるものがあると共に、恐らくは又中世ペルシアの小幀密畫の親

となつてゐるものだと思はれる。

中亞の繪畫は恰もこの地出土の諸鈔本のやうである。その繪畫の蒐集を見るにいづれを検しても隣接諸地の、否、遼遠な諸國までもの藝文の流れが互にこの盆地に落ち合つて混和夾雜してゐるのを感じざるを得ない。讀者にしてスタイン、グリーンエーデル若しくはルコックの圖版集を繙かるゝならば、圖を繰るに隨つて讀者は不思議にもあれを思ひ出す、これに似てゐるといふ心に驅られ、それが單に偶然の並存なのか或は又これらの描かれた神々や人々の系統が實際に時と處とを越えて遙かに遠い本原迄も伸び擴がつてゐるのかと怪しむやうな思ひになる。集の中には希臘風の貨幣や印璽もあれば希臘の甕の裝飾畫にでもありさうな裸形の力士もある。エヂュプトやビザンチウムや、あの「バユートの壁掛け」(“Bairout Tapestry”)を想ひ起すやうな人物畫もあるし、中にはまたクリスト教の僧侶かと思はれるやうなものもある。かと思へば支那の聖賢もあるし、アチャンターから寫したのかと見まがふやうな壁畫もあり、西洋風に云へばキューピッドかチエラブ(Ocherub天使)とても云ふやうな形の翼の生えた小供も出てくる。

スタインのいふ所に據ると、「氏の第三回の探検旅行の際に」氏はベルシア領セイスタンのヘルムンド河の注ぎ入る沼澤地方で一佛寺を發見したさうであるが、その中にはヘレニステイックの型の繪畫があつてそれらが「始めて印度の西北端の地に於ける希臘的佛教美術〔即ちガンダーラ式美術〕を中亞並に極東の佛教美術に結び付けるイランの鎖をその本來の場所〔即ちその結合を行つた當該地點〕に於いて示すものである」といふことである。

中亞の美術は多少自發的の點を缺いてゐる。肖像は數多くあるものであるが之を描く時を除いては畫家は自然を師とすることなどは勿論、自分自身の想

像や心に描く幻になへも據る所がなかつたらしく、
彼等は或る宗教畫を描くといつても自分たちが見た
まゝを畫き現はさうとはせず、印度や其他の國の畫
家の畫いたやうに描かうと努めたものやうに思は
れる」と。

この一節は一九一四年一月二十九日、丁度前獨帝
キルヘルム二世の天長節に、リューダーズ教授が伯
林の學士院で試みた御前講演「東トルキスタン新出
の文獻に就て」(Über die literarischen Funde von
Ostturkistan. Sitzungsberichte d. kgl. pr. Akad. d. Wi-
ss. 1914, VI.)と大體相通するものであるが、題名
の示す如くこの講演は文獻の新に世に現はれたるも
のに就いて多く語るに傾き、建築、繪畫、彫刻など
に關しては稍々手薄の感を免れない憾みがあつた。
故ヘルン教授の著「東トルキスタン發見古鈔佛典

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

發簡」(Manuscript Remains of Buddhist Literature
found in Eastern Turkestan, I, 1916.)の緒論の前半
も少くもその言語の方面に就いてはこの一節に類し
而も發行當時のものとしては極めて行き届いた、關
係文獻なども殆んど遺漏なき迄に注意してあるもの
であるが、これまた文學・宗教・美術等に疎なる點が
ものたりなかつた。(これはその緒論の性質上當然な
ことであつて註文する方が不當なのであらうけれど
も)。又コルヴェー氏の「中央亞細亞發掘志」(En-
tées en Asie Centrale. 及び Journal des Savants, 1910
—14に出づ)今 Mélanges de l'histoire et de Géogra-
phie, II, 1920, pp. 140-193 に收む)が主として探
檢の經過に重きを置き、發見品の研究、即ちそれら
の Funde がどういふ風に研究されたかを語る所が
少いといふ感じを抱いた人も多いことであらう。私
の幾度繰返して見ても飽きないペリオ氏の Les In-
fluences iranienne en Asie Centrale et en Extrême-

第一三卷 一二七

Oriental. Rev. de l'Hist. et de Litt. relig., 1912, pp. 97-119. は新発見の結果に基いて中亞の古史の一部面を短篇の中に巧みに纏めたものであつてそれとこれとがかなり似よつたものはあるがそれでも彼は見様に依つてはイラン文化の消長を中心として見た中亞並に極東史の略説とも見ることが出来、兩者の間には相應力の入れどころが異ふやうにも思はれる。ていづれにせよこれらの諸篇の出入ある點はこのエリオット博士の概説で相當によく補はれることと考へる。といつてもこれは今も云ふ通り、どこ迄も概説であるからその積りて見なければならぬ。もと／＼かういふ種類のものはスタインやルコックやグリーンエーデルなどの大著を精讀してこの方面の研究に極めてしつかりした知識を持つてゐる人々には用のないものであらうから、かういふ人たちは too brief としふやうな點で徒に註文が多く出ないやうに御斷りをして置く。これもさういふ人たちに

申すことではないが右に述べたことに關連して渡邊海旭氏の名著「歐米の佛教」特にその第六章及び同氏の「新佛教」や「宗教界」誌上に發表された諸説をも一覽せられんことを附記しておく。

所が以上紹介したエ博士の所論中、一二愚考を記して見たい點も無いではない。例へば所謂吐火羅語なる名稱の適否に關する博士の説、所謂回鶻語と稱するものに就いてのその見解、等に就いて鄙見を述べて大方の教を乞ひ度いと思つてゐるが、今それを書き連ねてゐると餘りに岐路に分け入る恐れがあるので茲には姑く之を省いて置く。但し吐火羅語に就いて先づ博士が "The other new language was spoken principally on its northern edge [of the Tarim basin] and has been called Tokharian, which name implies that it was the tongue of the Tokhans or Indoscythas. But there is no proof of this and it is safer to speak of it as the language of Kuchla or Kuchla-

nese. (p. 191.) と云はれた根據としては脚註にたゞ F. W. K. Müller (Sitzungsber. d. kgl. preuss. Akad. d. Wiss., 1907.) Sieg u. Siegling (Ibid., 1908.) (S. Lév(J. A., 1913) 諸氏の論文を擧げてとられるだけで其後に出た新著はこの篇を書かれる時には未だ參照の便を有せられなかつたらしいとを注意してあき度い。序に記るしてちくが本書第一巻の序文一九二一年五月附に據れば一九二二年以來著者は極東に在職してゐた爲 Recent Literature に接するの便を缺き漸く數ヶ月以前よりこれらを寓目するを得るに至つたとあり、従つてそれらに依つて本文を多少とも書き改め度いとは思ひつゝもその意を得ず、脚註に於て幾分か補訂を試み得たに過ぎなつたとあるからその積りて見る必要がある。されば博士のこの説が假りに正しいとしても今日では最近十年の間に漸次問題なり研究なりが進んで來たこの語に就いては、その名稱に關してももう少し新しい文献を見た上で説

を立てることが必要であらうと思はれる。(例へば Festschrift für Fr. Hirth" に收めた Reist の論文に引用された諸著、或は同書中の Stan Konow, Franke 氏等の所説 Sieg u. Siegling, Tocharische Sprachreste I. Berlin u. Leipzig, 1921 の序論など)。これらを參照された上では博士の説は果してどう變るであらうか、又變らないであらうか。私は歐西の大家の多くが吐火羅語なる名稱を適當且つ正しいものであるとせられるに反し、この言葉そのものが讀めず且つこの方面に就いて甚だしく淺學であるのに拘はらず、かなり頑迷にして不遜であるかも知れないが未だにこの名稱の確定的に正しく且つ適當なことを信じる勇氣がない。後年それが正しいと證明せられる時期が來ても、それは今日迄發表された材料なり研究なりに依つてははなく、更に新しい資料なり意見が發表されてからのことであらうと考へてゐる。かの *toyn* なる語が果してロイマン教授の命名した第一

言語の（厳密に云へばその一つのダイアレクト、普通 A という方）を指すものとしてもその意味が何であるか、これがすぐ *Toyapaa* なる語とたとへ人種的にせよ、又は名稱上のことだけにせよ、關係があると断定してかゝるのは如何であらうか。私は甚しく臆病なやうであるが、エリオット博士が、*But it is not clear what is meant by Tokiri*” (p. 161, note 3.) と云つてゐられることを尤もであるとしても、もう少しおいて考へてみても議論の手續に於いて間違であるといふ非難は受けまいと思ふ。（他日問題が明白になつた時に迂愚であつたと笑はれるかは知れないけれども）。この點は私はエ博士の説を得て一種の後楯を得たやうな氣がするのであるが、博士の説が今後どう變るかは分らない。然し私はその變ると變らぬとに拘はらず早く博士の高説を得て自分の蒙を啓き度いと思ふ。勿論歐西の學者の中にも、この新發見の言語を吐火羅語と稱することの非なるを唱

へ、又は少くもその適否はまだ疑問であると云つてゐる人たちも相應にある。シーク及びシークリク兩氏の如きこの問題に就いては極左黨とも云ふべき學者にあつてさへも、斯様な見解を採る時はなほ解き得ない疑問の残るのに頭を悩ましてゐる所を見ると、少くもこの説がなほ完璧のものでなく、ともかくまだ弱點のあるものであることを看破し得るやうに思はれる。（Vgl. Sieg u. Sieging, a. a. O., ss. IV—V.）かういふ點は餘り深入りをしない約束であるからこれはこの位にして切り上げることにする。

が、一寸附け加へて記しておき度いことがある。上述の新言語名稱問題に就いては私はエ博士の説に賛したものであるが、そのことを述べた文中に（前掲引用文）インドスキュタイ（即ち月氏）とトカラ人（*The Toklars*）とを同一視せる文句のあるのは如何かと思ふ。トカラ人と月氏との同視すべからざるはマルクワールトやスタン・コノウ氏の細かい研究

てよく分つてゐると考へられるからである。これらはこの節に對して意見を述べるに際しては或は稍々枝葉の瑣事であらうけれども氣がついたまゝに云ひ添へておくだけである。因みに月氏とトカラ人とを同視する西人は勿論外にもある。かういふ見解を取る人たちが月氏を以てクラシクタイターズの *toiy* or *Atari* に充てんとする人、月氏と貴霜王朝とを同一視する人、ギリシア人の立てたバクトリア國と漢史に所謂大夏國とを民族的に同一視する人、又言語上より云へば月氏を以てトルコ語を話したものと見る人、イラン語殊に所謂東イラン語に于關語 *toiy* or *Atari* と稱するもの(を語つたものとする人、所謂吐火羅語なるインドゲルマン的言語を使用したものとなす人、この所謂吐火羅語なる言語を使つた民族の自稱がアルシ (*Arshi*) と云ふ所からこのアルシは月氏の對音だといふ人、さうではない、これは干闥語の *uzzi*, *uzisi* (王) の音譯だらうといふ人、な

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

どと目下互に入り亂れて混戦を演じてゐる最中なので一寸手がつけられぬ。誰れか全然良く誰か全然悪いといふ状態なら比較的容易であらうが、この場合は誰にも一ヶ所つゞ位は尤もな云ひ分があるのだから輕々しく仲裁には入れない。第一仲人の腕が私の如き怪しいものでは到底飛び込んだ所で反對に怪俄をして歸つてくるぐらゐの話である。私はたゞ茲に序でを以てこの問題が今日非常に紛糾してゐるといふことの一端を少しでも彷彿せしめ得ればそれでいいのである。

ステン・コノウ氏の説の如きは所によつては非常に整然たる立派なものがあつて大いに敬服するのであるが、いけない所となると人が異ふかと思はれる程獨斷と空想の烈しいこと驚くべきものがある。これは氏ばかりではない。○漢史の大夏國がギリシア人の立てたバクトリア國と或る時代に於いて地域的に同一處であつたことはありうる。然し民族的にこの兩者を同一視することは危険である。最古よりあの地方にゐた土民が互に同一であるとしても支配者の方は幾度も異つてゐるし前に追はれた支配者階級の民族の餘類もあらうし爾く單純に片付ける譯にはゆかぬ。漢史の大夏(西域の)は月氏に服

屬する直前に於ては *Touyouou* の君臨してゐた國ではなかつたらうか (Vgl. Marquart, *Erasmihar*). この點に就くこの一説を含む近頃の *アールバイト* として私は茲に王國維氏の論文「西胡考」(附續考)(*亞洲學術雜誌*, 第一輯, 一九二一, 八月) を一價の讀値あるものとして注意して置きたい。勿論私の首肯し兼ねる議論もあるけれども。

もう一つ附け加へておき度いことはこれも些細なことて人によつては餘り重視しないことかも知れないけれども、矢張り細かく論議をする人もあることとて一言を試みる次第である。エ博士はこの新言語を當分「庫車の言葉」と呼んだらよからうと云つてをられるがこれは恐らくレネ氏などが所謂B種トカラ語を以て *Langue de Koukha ou Koukchiéan* と稱されたのに基きBと互に方言の關係にあるA迄もこの名稱の下に取り入れて下された命名ではないかと思ふ。若しさうとすればそれが今日庫車附近で通用する言語と混用されるといふ理由から寧ろ「龜茲語」とでもいふ方が間違がなからうといふ説が出ないとも限らない。嘗てロイマン教授がこの語を *Kushgur-*

isch と假に命名した時に、E. *Santhi* 氏がその現在のカシガル語との混同を避けて「疏勒語」(*Shule-sprache*) なる名稱を提唱したのもかういふ點に氣を配る所から來てゐる。所謂第一語を *Kuchari* 第二語 *Khotani* と稱するのも、右同様の混同に陥る懼れがあることと云つてこれらをそれく *Kudéan, Khotané* と呼ばうといふヘルン教授の提案も要するに同じ懸念から出てゐるものである。但しヘルン教授はこれらの名稱の語形の上から或る一方が誤解を惹き起し易いからといつて他の形を選ばれたのであるが語義からさへは *Kuchari* と *Kudéan*, と *Khotani* と *Khotanese* とは同義のものである。即ちいづれも今日の庫車なり和闐の言葉を指す語として了解される。だから真に教授の意に副ふ様にするには *Khotani* とか *Yit-tannese* とでも云はなければなるまい。次に一言し度いのはエ博士の回鶻文字・回鶻語とさふことに就いての見解である。博士はこの二語の

中、「回鶻文字」といふ方まだよほど正當であるが「回鶻語」といふことは不正確を免れぬ。何となれば所謂回鶻語とは天山の南北を通じて話された種々なトルコ語系諸方言の文語形としか思はれぬからである。と云つてをられるが(P. 192)これは如何であらうか。所謂回鶻文字なるものを回鶻字と呼ぶとの非なるは夙に一二の學者の主張せられた所で我が羽田博士の如きは早くよりその不適當なることを力説してをられる一人である。私などはこの方面の門外漢であるが、回鶻がターリムの盆地へ勢力の根柢を張るに至らない前の時代に於いて、即ち唐の咸通年間以前に於いて、この地方に據つた突騎施などの中に既に之を用ゐたものがあるのを知る以上、之を回鶻字といふの非なるを認めざるを得ない。なほ別の方面から同じことを云へば回鶻はその漠北時代には例のルーネンシリフトヤングト文字を使用してゐたのである。その時代に所謂回鶻文字なるものを用ゐた事があるとい

ふ證據を見ない。これが九世紀に入つてターリムの盆地高昌の附近へ入つて始めて既にこの地方に行はれてゐた、——さうして近頃この地方で發見せられる七、八世紀頃の古鈔本類に屢々見えてゐる——一種の文字を學び用ゐたものに過ぎないのである以上、私どもにはどうしても之を回鶻文字といふ理由が分らない。何となれば要するにそれは本來の回鶻の字ではないのだから。——が、回鶻語といふ名を妄りに使用するとはいけないとし、明白には云つてこそなければ天山の南北に於けるトルコ語族の語言の間にはそれらを互に方言として立て得るだけの獨立性がなく、従つて所謂回鶻文字で書いてある文記だからと云つて何も必しもそれが回鶻の語であらねばならぬといふ確徵がある譯ではないといつたやうなとを述べてあるのは一見識たるを失はない。(博士はたゞ天山の南北に使用せられてゐた諸トルコ語の文語形であると云つてをられるだけで何故特にそれが文

語形であるのかは不明である、又その全體の意味をも上記のやうに取つていゝか悪いかはすこしく疑問ではあると思ふが、若し博士の主旨がさういふのであるとすればこれは最近羽田博士が矢張り特に力説してをられることと同じと考へる。七、八世紀の交に或は回鶻と云ひ、或は突厥と云ひ、或は突騎施と云ふもその語言は爾く各個に特質ある *Dialects* ではなく、語彙も文法も大差のないものであつて今日そのいづれの部族の書き遺した文記であるかゞ判明しない以上、それがいづれの部族の語であるかは定め難い。たゞそれがこれらのトルコ語族のいづれかに依つて遺されたものだといふことを云ひうるに過ぎない、といふのが同博士から親しく聞き得た要點であつたやうに思ふ。これは今迄西洋の學者の殆ど氣を付けてゐなかつた點で羽田博士の新説であると思ふ。詳しくは近くその説を公表されるといふことであるから改めてその日を待ち度いと考へる。なほ博

士は當時の文記の中に出てくる *Scythians* といふ語も、その文記が所謂回鶻文字で記されてある時は西人は申し合せたやうに之を直ちに回鶻と見るやうであるが（例へば例の喧しい「彌勒下生經」の奥書に見える *Scythians* といふ語など）これは決してさう見るべきではなく、第一、九世紀に於ける回鶻の高昌占據以前の文記にあつてはそれが所謂回鶻文字で書いてあつたとしても何も回鶻に關係はないし、第二、前述の如く回鶻語といふものが當時のあの邊の諸トルコ語族の語に對して特に一旗幟を立てるだけの特徴がないとすれば之をその邊のいづれのトルコ語に充てゝも差支ないのであるから之を回鶻と速断するが如きは誤であるとし、殊にこの *Scythians* といふのは實に突厥のことである、あの時代 *Scythians* といへば之より外にない、我々は今日使つてゐる大きな *Scythians* としてのトルコといふやうな意味を以てこの語に臨み易いが之は大いに避けねばならぬといふことを云

つてをられる。これも近々發表せられるといふことであるから萬一私の紹介には間違つてもあるといけな
いから確かなところは博士執筆の論文で見て頂き度
いと思ふ。

岐路や餘り細かい條々に入るまいと記してゐる
つゝ筆が逸したやうであるから、さういふ點に關す
ることはこれで打ち切つて次に第五節のうち特に中
亞に於いて佛教に及ぼした或は及ぼしたらしいガラ
トウシトラ教の影響に就いての項を鈔出して見よ
うと思ふ。著者は先づ、

「ターリム盆地とオクソス河流域とは、こゝに幾
多の異宗教と異文化とが互に混りあつた處であつ
て、この地に於いて佛教がガラトウシトラ教若し
くはクリスト教と接觸して變化を受けたかも知れぬ
といふことは想像に難くない。問題はただかくの如
き接觸變化に對して何か證據があるかといふことに

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

過ぎぬ。中亞が諸宗教の取引所のやうに見えるのは
特にその支那に對する關係に於いて然りである。此
地は印度の美術思想を支那に傳へたがその際此地特
有の或る要素を附け加へて之を送つたのであるが、
再び之を支那から更に何か色彩を加へて受取つてゐ
る、「勿論」この地がペルシアより受けた所は決して
少くない、かの色々なイラン語で書かれた古抄本の
數「多いこと」が疑もなく之を語つてゐる。又同様
にその印度に負ふ所「の多いのも」疑がない。けれ
ども一層興味のあるやうなことは印度の佛教が中亞
に負ふ所ありや否やを定め、その負ふ所がどういふ
點であるかを決することであらう。西藏に對しては
關係は相互的であつて西藏人はターリム盆地に占據
すること一百年「に及んだが又」その傳ふる所に據
れば于闐より僧侶が往いて西藏を教ふる所があつた
といふことである。と云つてこの地に於ける諸宗教
の接觸混和の状態を述べ、次に其地に行はれた佛典

はどういふものがあつたかといふことを記し、
 「中亞に於いて發見せられた佛典はその建築の如く數個の時代を代表してゐる。先づ第一に土魯番・敦煌及び和闐の地方で見出された梵文の阿含の斷片がある。又土魯番發見の馬鳴作戯曲及び詩歌の斷片や庫車新出一切有部の「十誦律比丘戒本」及び多數の「法句經」若しくは「無問自說」(「感興語」(dāna)の如き選集の諸國語譯などがある。それらの中最も興味のあるのは和闐の附近から見出されたそのブラークリット譯であるが、なほ斷片ではあるがそれらの吐火羅語及び梵語に譯されたものも發見されてゐる。すべてこれらの文献は略々迦膩色迦王時代及びガンダーラ彫刻の時代に於ける經典の倂を示してゐるのであつて、もし然らずとするも少くも經典としてはその古い層の方の形態を今に傳ふるものである。」と云ひ、更に、

「新しい層の方は大乘の諸經から成りその數は極

めて多いが、まだ今日迄その完全な目錄は世に出てゐない。萬一あるにしても少くも目下(一九一四年)當香港に於いては余は之を參照するの便を持たない。然し「般若波羅蜜陀經」や「法華經」や「金光明經」の行き亘つてゐたことは立證されてゐる。金光明經」は回鶻語(漢譯より)及び東イラン語に譯されてゐる。又稍々時代は降るが陀羅尼がかなり澤山發見されてゐる(と云つて陀羅尼が皆稍々後世のものだといふのではないが)。と云ひ進てそれらの經典の中には中亞で撰述されたものがあるを指摘し「シルヴァン・レギ氏は或る種の大乗經典は中亞に於いて書かれたか又は書き直ほされたものであるといふことを證明した(これは獨り正經に止らず僞經さへも中亞に於いて編述せられたらしい證據がある。之に對してはレギ氏の *Mélanges d'Indiologie*, p. 329 に引けるペリオ氏の所説を參照せられ度し)。即ちこれらの諸經典には當に中亞の地名を列記

した表が出てくるのみならず、かゝる地名はいづれも特に重視されてゐるものであつて、これはこれらの經典の撰述者（若しくはその撰述者が目指してゐる相手の公衆）の郷土を中心として物を見る爲に特にかく重く視られるのであるとしか考へられない。

「つまりこれらの經典が中亞で出来たればこそ、中亞の地名が特に重要視されるのであらうといふこと」とされば「大乘大方等日藏經」が于闐附近の牛角山（Gosringa）を讚するのを見ると恰もブラーナ（Purana）がそのマハートムヤヌ（Mahātmyas）といふ特別の數章の中に或る聖地の勳を稱へてゐると同じやうである。更に著しいのは「大乘大方等月藏經」中の「地名の」列表である。これらの諸典に共通な佛陀の大涅槃の光景の或る一つの中に、佛陀は光明を發してその光明からは無數の佛陀の化身が作り出されると云つてある。所へてそのうち印度は（西域と稱せらるゝ地と共に）八一三の化身を有し、中央

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

亞細亞と支那とは九七一のそれを有する。これらのうち支那全帝國は二五五を有し、于闐及び龜茲の兩國はそれぞれ一八〇及び九九を有してゐる。之に反してペナールヌには僅に六〇、摩揭陀には三〇を配付せられてあるに過ぎない。明かに中央亞細亞はこの表の撰者にとつては極めて大切な處だつたに違ひないではないか。」と云ひ、ともかく佛典の上に中亞といふものゝ色彩が加はつて來たことを示し、なほ土魯番で發見せられたトルコ語の經典の一つはトルコ人として記されてゐる「Fapusta 及び Bhalika なる二商人に對する佛陀の説教を含んでゐるがその中にインドラのことを Korussa 即ち Heruz と呼んでゐる。又他のものゝ中にはブラーナのことを Asra 即ちイランの神ゼルツァン（Zarvan）に比定せらるゝものゝ名を以て呼んでゐる（Bilichinea Buddica, XII, pp. 44, 46; XIV, p. 45.）これらの事例に於いては何等教義の上に變つた所が見える譯で

第一三卷 一三七

はないが、鬼神と人間との世界が「かくの如く」印度的でなくなり中亞的になつて來るとすれば、そこに教義の上にも亦多少の地方色「ロカルカラー」が着いてくるだらうといふことは、極めて自然なことである。(トルコ文の經文の中には佛陀のことを繰返して神 (Tangri) 若しくは「諸神の神」と云つてあるが、この後者はイランの影響を受けて出來たものと思はれる。梵語にも佛陀を稱して「諸神の神」(Devātāna 「天中天」といふ)と云つてはあるがトルコ語の場合のやうに明確に且つ幾度も出ては來ない。さうして此梵語の云ひ現はし方が既にイランの感化を受けて出來たとさへ考へられるのである。)と云ひ、この地で佛教の受けたイランの影響のほんの一端を點出し來り、更にこの地の性質上支那の思想の影響も佛教の上に加つて來たことを説いて次の例を擧げてゐる、即ち

「かくて四六九年高昌に建てられた寺の年紀ある碑銘には支那思想(儒・道共)と印度思想との混同が現

はれてゐる。これは彌勒即ち小乗の徒に知られてゐたこの菩薩の徳を頌したものであるが、此際にあつては彌勒を單に來世の佛として見てゐるに止らず、今現に生きてゐる慈悲深い神と見做し、その體は色々な形に化現せられてゐると考へられてゐる。この見解は無著の著述が彌勒の啓示であるといふ傳へと同じ考へである。また「この銘文の中には」虚空藏とか法身とかいふ語も出てくるが、同時にまた世の支配者を「天」と云ひ、宇宙の理法を「道」と唱へ、更に數種の支那の文献を引證してゐるくらゐである(中略)。「此碑は北凉の遺族沮渠安周の爲に建てられた彌勒寺（註）のそれであるがその Eusebius 著の *Enchiridion* によつて *Inschrift aus Idiquishuri*, Arab. zu ? Abh. d. I. J. p. Ak. d. Wiss. 1907 に解説したことがある有名なものである。但しフランケン氏の研究には議論すべきものが多くシヤンツァン氏 (T'oung Pao, 1938) エリオット氏 (BEHOLD, 1938) 等の批評もあり」新佛教(第十二卷第一號)に陳芬 兩人の酷評もあるものである」

それから更に細論に入つて特にザラトウーシトラ教が中亞に於いて佛教にどんな感化を與へたかを論じ、次のやうに之を述べてある。曰く、

「然し乍らザラトラーシトラ教は佛教の發達並に變形に與つて力があるらしく思はれる。されば迦膩色迦王の貨幣にはペルシア諸神の像が佛の像よりは遙かに多く現はされてゐる。我等は支那の史料に據つて祇佛兩教が干闥及び疏勒に並び行はれてゐたことを知り、またペルシアの經典の中に見える異端者 Buitē (異端者 Gaokema) 等の語によつて祇教の佛教と相敵視してゐたらしきことを考へる。[Buitēは佛陀 Gaokemaは喬答摩である]。Stein, *Zoroastrian deities in Indo-Seythian coins*, 1887; S. B. E., IV, *Vendidad*, pp. 145, 209; XXIII, p. 184; V, p. iii 參照)。

と云つて我等は大乗佛教の異國起原を探り出したと考へるのは眞に大早計である。大乘の教へは巴利經典に現はれた佛教とは異つてはゐると云ふものゝそれは印度で發達した者であつて外國で成育したものではない、色々なものを神とすること、汎神論、光り耀く神や忿怒神を造り出したこと、形而上學に

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

於ける極端な唯心論又は虛無主義などは佛教に於いてと同様に印度教にも明瞭に現はれてゐる傾向である。佛陀三身論〔法身・應身・報身の〕の如き如何にもクリスト教の三位一體論からでも出たかと思へ考へられるものさへ、クリスト紀元前數世紀の古へにその根を有してゐるものではないか。けれども後世の佛教が多く神々を印度教の神界より借りて來てゐることは明かである。また阿彌陀・觀音・文珠、及び地藏等の諸佛諸菩薩が印度に明瞭な祖神を持たないとするれば、それが矢張り他の宗教のミノロジーから借りて來られたものとも疑へるし、もしかする際似よりの神々がザラトラーシトラ教に知られてゐたとすれば之を以て彼等の本源と認めても悪くはなからう。

これらの諸佛・諸菩薩の中一番重要なのは阿彌陀である。彼は不思議にも古い時代の印度佛教美術並びに文學に於いては不判明である。ガンダーラ彫刻

中の無名の佛像中には阿彌陀を現はしたものがあ
 かも知れない。然しこれは證據のないことであるし
 又グリーンウエーデルやフーシェーの著述に據ると
 阿彌陀の像は觀音や多羅（陀羅^{Ṭoṭā}）に比べると時
 代も新しいし數も少いらしく思はれる。「法華經」の
 古い部分には（例へば第七品）阿彌陀は一寸出ではゐ
 るが何等特別の大切な者としては記されてゐない。

（第二十二品及び第二十四品等に見える記事は詳し
 くはあるが後世のものである）。彼はまた「大乘起信
 論」の終りの方にも出てくるが、この經典は馬鳴造
 と傳ふるものゝその撰述者に就いては異論があり、
 若し假りに彼の作であるとした所でこの阿彌陀のこ
 とを記した部分は議論の本筋とはかけ離れたもので
 恐らく「後世」の補添であらうと思はれる。無著の
 「大乘大莊嚴經」（第十二卷）にも阿彌陀の淨土の事は
 出てくるが一寸示説せられてゐるに過ぎない。

かく印度の文献には阿彌陀の事が貧弱且つ粗末に

記されてゐるに反し、かの漢文に移された阿彌陀教
 の重要な聖典が（その二つは第二世紀に四つは第三
 世紀に）いづれも中央亞細亞の人の手に依つて譯出
 せられたといふ事實を茲に提出して見度い。この事
 實から推して考へれば阿彌陀の崇拜は中央亞細亞に
 於いて上記諸漢譯本の最古のものゝ時代よりまだ前
 に既に盛であつたといふことを拒むことが出來ない
 のである。

西藏の佛教史家ターラナートン（Tharantun）に従
 へば阿彌陀の崇拜は *Saraha*（若しくは羅睺羅 *Rahu-*
Indra）の時迄溯るといひ、彼は龍樹の師並に方
 術の士として名聲あり、阿彌陀を *Dingko* 國に
 見、その逝かんとするや西方淨土に面を向けて瞑目
 したと云ふ。（Schleier, ss. 93, 105, 303; Pruden,
Parthian, No. II.）余はこの *Dingko* といふ名稱に
 關して何等の説明を見出し得ないが *Saraha* といふ名
 はどうも印度語らしい響きを持たない。彼はもと首

陀羅であつたと傳へられた西藏の繪畫に於いては

髻を生やし頭の頂きに髻を結ね、手に矢を持つた姿に現はされてゐる。この傳への裡には殆ど史實と稱し得べきものがない。にも拘はらずこの傳へが最初の阿彌陀崇拜に關係ある者として擧ぐる所の人物が

卑賤なカーストに屬するものであること、外國語らしい名前を有し、この神「阿彌陀」に或る未知の國に見えたといふこと、及び多くの密教の諸師の如く全然佛僧と異ふものゝやうに現はされてゐることだけはどうもさうかと思はれる。彼がオクス地方又はトルキスタンから來たものであるといふことは證明することが出来ない。けれども右の起原をかくの如く見るならばこの傳説中の疑問を多く説明することが出來ようと思ふ。「又西南の地方から來たものとするならば」印度の域内なるペンシフルやタキシラにザラトゥーシトラ教の感化の及んでゐたことを考ふるには些の困難もなすてあらうから「それでも少し

も差支はない」。

稍々後に至つて世親は阿彌陀の信仰を説法したと傳へられるがこの教へは印度に於いてはその極東で得た重要さの十分の一程の重さをさへ置かれなかつたやうに思はれる。

阿彌陀教の眞髓ともいふべき形相は一の極樂淨土があつて之が一の慈悲深い神に屬するといふこと、及び善人にしてこの神の名を稱へるものはこの極樂へ導かれるといふことである。(唯だ信じさへすれば救はれるといふ教へは後代のものゝやうに思はれる。阿彌陀經の少し長い、且つ稍々古い時代のものらしい譯本には先づ善根を積まなければ極樂へ行けぬと主張してある)。この形相は共にザラトゥーシトラ教の書典の中に見出される。善き考へ、善き言葉、善き行ひ等の各極樂の次に至高の天界があり、無限光又は無窮光と呼ばれる。(S. B. E., Vol. IV, p. 293; Vol. XXVIII, pp. 317, 344.)この天界及びその主アム

ラ・マズダはいづれも常に燿輝と榮光との意を含む語を以て語られる。この極樂はまた歌の國であつて恰も阿彌陀の淨土が樂の調へと快き音色とを給するといふのに似てゐる。更にまた不死長生の天使アメレタート (Amelat) が植物界を支配するといふことゝ阿彌陀の淨土は花に満ちてゐるといふことも「茲に相並べて」注意して置くのに値しようかと思はれる。祈ればこの極樂を贏ちうる、さうしてアフラマズダと天使たちが來つてこの樂土への道を信厚き者に示すとすふ。(S. B. E., Vol. XXIII, op. 335-337.) 又誰にてもアフナ・ヴァインヤ (Ahna-vaitya) の題目を唱ふればアフラ・マズダは唱ふる者の心を「天の光」「の國」へ齎すべしとすふ。(Ibid., Vol. XXXI, p. 261.) 更になほアフラ・マズダの御名を繰返し唱ふれば極樂に至るべしといふことは、余の知れる限りに於いては明白に記されてこそゐないけれど、それでもこの神の名を念ずることが一般に祈願にきゝ

めありとせられてゐることは明かに肯定することが出来る。(Ibid., Vol. XXIII, pp. 21-31.)

かくの如く阿彌陀の淨土の主なる形相はいづれも皆ヘルシア的である。たゞ阿彌陀が誓願をなすに依つて之を開くといふ行き方だけが佛教的である。勿論印度人の想像力が既に幾多の極樂淨土を腦裡に描き出してゐたことは確かであり、初期佛教の説話に兜率天を語るものゝあることも事實である。然し西方淨土といふものはどうしてもこれらの樂土——幸福の住址とは似もつかない。西方淨土は突如として佛教の歴史の中に飛出して來たもので、何となく異國のものらしく、親木に手早く巧みに接穂したもののやうに、而も動もすればその親木を蔽ひ去る程に茂つたものゝ如く見受けられる。(因に云ふ、西方淨土即ち Skandavati と、「ペシルヤ人の所謂」 Sauravastan 即ち不死の仙人に依りて治められ Budehishu に従へばトルキスタンとチニスタン(震旦)支

那)との間に在りとせられてゐる一地との間に何か關係があると思はれるであらうか。余は語源上の關係は無いと想像するが、若し Daksvastad が祝福せられたる人々の國として普く知られてゐたものとすれば、それに似た發音の「Sudhavat」といふ」有名な梵語を特に選び出すのに與つて力があつたかも知れない。

觀音も亦阿彌陀の淨土と關係がある。その形像は起原こそ不明なれ、印度に於いては立派に古い時代から際立つた、顯明な地位を保持してゐて、之を特に中亞と因縁のあるやうに云ふ理由がないやうに思はれる。然し乍らそれ程古くない時代の文献には觀音を以て阿彌陀の精神の子 (スピリチュアル・ソン) 若しくはその反映・返照であると説いてある。これは確かにイランの思想でかのフラヴァシ (Fravashi) 即ち各人の人格の一部分と認められ、而もその人の誕生以前よりその人とは離れて獨立に存する魂魄・

精靈の如きもの」を想ひ起させるものである。(このフラヴァシは獨り人にのみならず、時に神物 divine beings にも屬しうる) 印度には澤山神佛の化身と云ふものがあり、その説明も數多くあるが一つとしてこのザラトゥーシトラ教のフラヴァシに關する教義程的確に或る「禪定佛」(Dhyāni Buddha) とその菩薩との關係を説明してゐるものを見受けなす。

シルヴァン・レギ (S. Lévi) 氏は文珠菩薩の吐火羅起原を暗示したことがある。(J.A., 1912, I, p. 622; Le Napt, pp. 330 ff.) が、五台山に於ける文珠の崇拜は古くよりのことなので、後世の印度の傳説は遂に彼を支那と因縁あるものとしてしまつた。かういふことは地方々々でそれ／＼行はれネパールはネパール起原を、西藏は西藏起原を、于闐は于闐起原を唱へ、時には文珠を以て文化又は宗教を最初に教へた人としてゐる處もある。然し文珠の中亞起原といふことは明かにさうなのであるが、余は今日に於

いてはまだその明確な證據を見出すことが出来ない
のである。

地藏菩薩の場合も之と似てゐる。地藏は印度には
四世紀の頃には知られてゐるが、さう主要な著しい
ものではない。が、少くも七世紀迄はその崇拜は支
那で盛であり、惹いては極東に於ては地藏は觀音に
次ぐポピュラーな神となり、遂にはその爲め段々と變
じて死者の「守護」となる迄になつた。地藏が中亞
にも知られてゐたとは確實であつて、この地の摩尼
教徒には「明使」の一人と見做されてゐるくらゐで
ある。(Chavannes et Pellot, J. A., 1911, II, p. 549.)
けれども地藏が中亞で初めて重要なものとなつたの
か、支那で初めてさうなつたのかは遽に定め難い。
支那人が死者に手厚い供養を捧げる所から考へれば
地藏を「死者の神として特に重視し」之に重大な位
置を與へたのは彼が支那人の間へ傳はつてからのこ
とではないかと思はせられる。然し地藏が來世への

引接——道案内の役を勤めるといふことはザラトッ
ーシトラ教の天使であるスロシ (Srosh) が同様の慈
しみの深い働きをするのと相並んだ事例である。(地
藏に就いては De Visser, 'T'isang, Oostersatische Zeit-
schrift, 1913-15. 参照)。

東洋史上中央亞細亞の重視すべきことを示す最も
明快な看板の一つは、この地が余のこれより説かん
とする支那佛教の最初の、而して大體に就いてその
主要なる淵源であるといふ一事である。いくらか後
代に及んでは名僧智識の海を渡つて支那に來たもの
も勿論ある。なほ降つて元の時代に於いては喇嘛教
が直接に西藏から傳來したやうな事もある。然し少
くも西歴の紀元頃より以後は引續いて「多くの」僧
侶が中亞より東して或は布教に譯經に従つたこと、
及び支那の求法行脚の僧が正法を覺めて天竺に出か
けたのは、さづれも中亞を通つてゐたといふこ
と「は否むべからざることである」。云々。

右の一節の主要な點は改めて云ふ迄もなくザラト
ウィントラ教の佛教に及ぼした感化といふことであ
るが、これは嘗てペリオ氏なども一寸觸れた問題で
既に前掲の論文 (Les influences iraniennes) 中に阿彌
陀佛に就いての感想を述べてゐるがこれ程立ち入つ
て稍々詳しく之を推究した人は私の甚だ寡聞なる今
日迄全く知らなかつた所である。若し日本の佛教學
者に既にかやうな説を提出せられた人があるとすれ
ば私は私の淺識と不詮索とを恥づるが私は本邦の佛
教關係文獻には甚しく疎い者であるから幸にその邊
は寛恕を願ひ度い。(或種の佛典の中亞編述に就いて
は文學士羽溪了諦氏がその著「西域の佛教」大正三、
再版、頁 339, 345 に於いても論じてをられる。エ
博士の述べられた所と相補ふものがあると思ふから
參照して見られたら結構と思ふ)。

所でエリオット博士は右の一節の主要點と覺し

エリオット氏著「印度教と佛教」に就いて

ことをこの書の別の處でも論じてをられ、多少重複
に亙る嫌ひがあるかも知れないが上記の所説を更に
確かにする役には立たうと思ひ、なほ之に博士がペ
ルシアの文化が一般にインドの文化に及ぼした感化
を論じられた一章の一部をも附して次に附け加へて
おくこととする。

「西紀前五三〇年以來、約二世紀の間ガンダーラ及
び他の西北印度諸地はペルシアのプロヴェンスであ
つた。ザラトラーの時代と(それが何時であら
うとも)この時代と間の時期に就いては印度の宗教
とイランの宗教との關係がどういふ風であつたかを
述べるものが出来ない。が、七世紀以後に於いては
兩者が同一地域に並び榮えたことは確かである。ア
リストブルス (Aristobulus) はアレクサンダー大王時
代のタクシラに就いて物語る際、「その地の」婚姻^{マツリム}
市場及び死者を兀鷹に喰はしてしまふことを記して

ゐるが、これはバビロニア及びペルシアの風習であつてなほその外にも多くの奇習があつたのであらうがこの外來の一旅人にもさまざま奇とするに足らなかつたものだらうかと思はれる。

現存の印度最古の建築即ち孔雀王朝の建築が一つとしてその祖先と認むべきものを印度の中に持たないに反し、それらが構造に於いても(特に柱)又裝飾に於いてもペルセポリス「の建築」を想ひ起させるものがあるといふことは専門家の間に大體異論のない所である。丁度それは阿育王が石碑に文を刻してその臣民に向つて説教を試みた習慣や、その文句の辭具合などがダライオス王の碑銘を聯想させるのに等しい。(ナクシルスタームのダライオス王の陵に近き一碑銘は阿育王の諸碑の銘の如く *hortatory* な所がある。Jackson, Persia, p.298 及び references 参照。)さうして阿育王の信する所には——例へば動物に對して王が優しかつたといふやうなこと——には純印

度風な所もあるが、と云つて王の信條全體がこの調子で且つその題目の選び工合も斯様であるとは云ひ得ない。王が著しく神學や哲學を回避したこと、さうして倫理上の原理例へば眞實といふが如きことを主張したこと、並に人間は來世に於いて幸福に暮すことが出來るやうに此世に於いて善根を積まねばならぬと卒直に論じてゐること、などから考へると王はどうも單純にして實行的なザラトルシトラ教の外觀になりとファミリアーになつてゐたのではないかと思はれる。恐らく王がなほ若年の頃タキシラの總督として任にありし頃、「さういふことがあつたのではないかと考へられる」。けれどもなほ王にあつては何等有神論又は二元教の佛を見ることは出來ぬ。道徳が王の唯一の關心の事であつたのである。(たゞ王の道徳といふのは惡を抑へるといふより善事を行ふといふ意味であるが)。(因に云ふ、印度最古の彫刻に佛陀を表はすべき所にわざと之を缺いてゐる

ことは有名なことであるが、それは最も聖なるものは之を形に表現すべからずとの思想から來たものらしく、やはりペルシアの感化に負ふ所があるやに考へられる。

阿育王の歿後その帝國は無解し、たとへ血は必しもイランでないにしろ文化に於いてはイラン的である民族が之に乗じて侵入して來た。ペルシア又はバルティア帝國の屬領が印度に迄擴がつて來、マトゥラ (Mathura) 及びサウラーシトラ (Saurashtra) の兩サトラピーの如きは全く印度の域内に存するといふやうな状態に及んだ。貴霜王家が自らと共に持ち來つた一種の混合文化の中にはザラトウーシトラ教もあつたことは確かであり、迦風色迦王の錢貨に之を徴することが出来るのであるが、貴霜王朝の末葉の貨幣に至つてはサーサン王家の感化が北印度に於いて著しく強烈になつたことを示してゐる。これが三世紀のことであるが、この時に至つて貴霜王家

は遂に衰滅してしまつたのである。

余は番答摩自身がイランの思想の影響を受けたと考へる理由を知らない。彼の根本思想、彼の人生觀及び彼の救世の仕組システムはいづれも純粹に印度的なものであつてイラン的のものではない。けれども假りに佛教はその少年時代が印度的であつたとしてもそれが成人に達する境涯は各個人の寄合場「のやうな地方」で過ごされ、そこではペルシア人及びその風俗がフミリアーであつた「といふことを忘れてはならない」。錫崙へ傳へられた佛教は斯様な境涯に入ることを免れたが、大乘教や一切有部の教などは確かに右に述べたやうな世間を通過して來てゐるのである。だからと云つてザラトウーシトラ教の「佛教に及ぼした感化の」分けまへを過大視することは避けねばならない。かの印度佛教に於ける形而上學的、儀禮的な傾向などは専ら印度的のものであつて、その偶像を自由に使用することなどどこか外國の刺

教によるものとした所でその刺戟は先づ希臘のものらしく思はれる。然し乍ら、大乘佛教の愛他主義の道徳は、たとへザラトゥーシトラ教から借りて來たものでないとするも、「佛教の發展史上」一變轉を畫するものであつてこの變轉こそはかの進んで愛を人に類つ active charity の教へを宣布すること年あり、自己一個の修養と獨善的成道との理想に満足せざる民族の間に起つたものに違ひなからうと思ふ。ザラトゥーシトラ教の感化は主なる諸菩薩の形相や（彌勒さへさうであるが）就中阿彌陀及びその淨土に就いて争ふことが出來ないと思ふ。彌勒に就いては嚴密に云ふならば右のやうなことを斷じうる確證とてはないのであるが、實際上から見ると彼の形像はザラトゥーシトラ教徒が救世主、世の建て直しをするものとして尊んでゐる Soshyos 若しくは Sosyant に多くの類似を有してゐる。これらの諸佛・諸菩薩は手際よく印度の諸神論の中に取り入れられてしま

つてゐるが、彼等は何等印度にその系圖を有してゐないのであつて、又如何に辨疏に努めた所で阿彌陀及び阿彌陀の授けてくれる救ひといふものはどう考へても釋尊喬答摩の教とは奇怪な矛盾を示してゐるものである。余は別の章節に於いてこれらの光明遍照の大慈大悲の諸佛諸菩薩と、又その主の名を繰返し稱することに依つて入ることを得る無限光の天界とアヴェスタとの間に存する密接な類似を指摘して置いた。また古い時代に於ける阿彌陀の信仰を中央亞細亞と因縁あるものと見做す然るべき理由のある「とも述べてゐいた」。後代に於ける「印度への」イランの影響はザラトゥーシトラ教と共になほミトラ教及び摩尼教を數へることが出來よう、さうして無著の學統は何等かこれらの諸教に負ふ所があつたらうと思はれる。これらの諸教が自らと共にクリスト教又はクリスト教に類似の教へを齎らしたといふことはあり得よう。が、余は阿彌陀教の教義をクリス

ト教から出たものと見ようとする企ては一切空想的なものと考へる。兩者唯だ一つの共通點は信仰に依つて救はれるといふ點だけであり、而もこの教へはクリスト教よりはずつと古いのである。これを外にしては阿彌陀の人類を救はんとする努力は何等クリスト教の贖罪の説などに類する所を見ない。又多くの諸佛・諸菩薩間の關係なども、クリスト教の三位一體説などを想起せしむるものではなく、寧ろペルシアに於けるフラヴァシを思はせるものがあるのである。」(III, pp.449-452.)

觀音と文珠はクリスト教及びユダヤ教の傳ふる天使若しくはザラトラーシトラ教の Amesh Spentus に類する。この後者と彼等は歴史的關係があるかも知れない、何となればペルシアの思想はクリスト紀元の頃に正に佛教を感化したらしく思はれるからである。それらの諸菩薩「觀音・文珠は勿論それ以外のものまでの外國起原を證明するのは困難であるとし

ても明瞭に印度起原のものは僅かであつて彼等のすべては遙かによく中亞及び支那に於いて知られてゐるのである。たゞ彼等は印度の天部の形貌と持物とを以て現はされてはゐるが」(Vol. II, pp. 12-13.)

以上で大體エリオット博士の意のある所は分ると思ふ。私はこれに就いてたゞ極めて suggestive な、又中々 *insightful* な興味ある新説として甚だ有益に且つ面白く一讀をしたといふ以外何等云ふべきことを持たない。顧るにもうやがて六年程前になるが、大正六年の夏北京に於いて私は當時のモリソン文庫に於いて初めて博士の聲咳に接し引續いて約一週日の間同じ書庫の裡に親しく博士が寸陰を惜んで孜孜として勉強してをられる姿を見ることを得た。博士はシミット「蒙古文典」や「蒙古源流」の獨譯だのスリエの「オールドス蒙古文法」だの外になにか西藏語關係の書物を繕いてポケットから取り出された雑多

な紙片に頻りに鉛筆を走らして蒙古字などを書き取つてをられた。あの當時やつてをられた調べの一部が直接なり間接なりに本書の中に流れてゐるのかと考へると私には特に一種の親しみが感じられる。「日本へは御出になりませんか」と尋ねた時「僕はもう三度も行つてゐる。然し又來年は行くよ、多分」と云はれ乍ら、北京名物のあの猛烈なシヤワーにぐつすり濡れ乍ら(傘などは役に立たぬ)書庫を出て行かれるづんぐりした博士の風事が今でも目に浮ぶ。其後「來年」ではなかつたが日本へ大使として來られてから未だ機を得ずして再び博士に見える折がない。この一篇は別にその時の *Erinnerung* の爲にといふ譯ではないが、博士にはさういふ縁がある爲に新刊の到着を幸ひ私には甚だ力及ばぬ方面であるがこゝにこの割記同様のものを挿して見たのである。これでこの蕪雜なる紹介を終ることにする。

追・記

○第一二七頁上段リューダーヌ教授の講演の條にガイゲル教授が一九二二年十一月四日エルランゲン大學副總長就任の辭として述べた講演をも附け加へておく。これは Geiger, Die archäologischen und literarischen Funde in Chinesisch-Turkestan und ihre Bedeutung für die orientalische Wissenschaft, Erlangen, 1912, S. 3-18) として出版されてゐる。簡單なものであるが、終りに便利な文献目録が附けてある。

○第一二九頁下段にシーク及びシークリンク兩氏の著書の序論を擧げたがこの書は私がこの稿を終つてから親しく見るとを得たので本稿を草する際には羽田博士に御願ひして同博士所藏のものに就いて序論の一部を寫して頂きそれによつて一應編者の意見を窺つたのであつた。茲に記して羽田博士に深く御禮を申度。

○一四五頁上段二行目へ。ザ教の佛教へ及ぼした感化といつても、その回鶻譯の經文に見える、ブルシア要素などに就いては(即ち一三七頁下段に記されたことなどは)、既にエ氏以前に説いた學者がある。

○エ博士の文を譯出した處には博士の附せられた脚註を私の考へて或は採つたり或は省いたりした。一言御断りをしておく次第である。